

■フォトエッセイ■

西アフリカ、ブルキナファソの今

—モシ族の暮らしノート—

写真・文 松永朋子
Tomoko Matsunaga

アフリカの布。カラフルな布は、アフリカを語るのに外せない要素だ

赤茶けた、乾いた大地が広がるその国—日本から飛行機で約一九時間飛んだ先にみえてくる。西アフリカに位置する、ブルキナファソという内陸国。日本の人々にブルキナファソというと、その大半は一度で聞き取れなかったり、なかなか国名を覚えられなかったりする。季節は二つ。雨期と乾期。雨期はたったの三カ月。それ以外の九カ月は乾期である。つまり、一年の大半は乾燥し、湿度は一〇%以下。着陸直前、上空から見下ろす首都ワガドゥグは、一面茶色であり、その風景は、まさにイメージしたアフリカそのものであったことが今でも忘れられない。どこか異国に来てしまったらしいという胸の高鳴りを、つい昨日のことのように思い返すことができる。

青年海外協力隊員として、二〇一三年七月〜二〇一六年一月までの二年六カ月をブルキナファソの村落部で過ごした。そこでみえてきた、アフリカの今を記す。

上空から見た首都ワガドゥグ。一面茶色である



典型的なモシ族の家。周囲に藁葺き屋根の家があり、真ん中に台所がある



村の王様の家の前。村人は、木の下の陰で集会をする

●ブルキナファソという国

人口約一七〇万人、国民の約六割がイスラム教徒、その他キリスト教、土着の宗教などの信仰が根付く。国土は日本の七割程度、約六四の民族からなる多民族国家。とはいえ、その約六割はモシ族である。各民族は、それぞれの言語を持っている。つまり、約六四言語が存在することになるため、ブルキナファソ人（以下、ブルキナベ）同士のコミュニケーションも、公用語であるフランス語で行われることも多い。

●モシ族の村人たち

国民の約八割が村で農業を営む村人である。そのなかでも大部分を占めるのがモシ族だ。モシ族の村社会では、各村にナーバと呼ばれる王様を擁している。さらに、村は四〜五個の地区に細分化され、地区ごとに地区長も存在する。王様は絶対的かつ権力と名声を得た存在である。村で何かするときには、事前に王様の許可を得る必要があり、また、初めて村を訪れた際にも必ず挨拶をしなければならぬ。かつては、王様の言葉を伝える伝達者を介してしかコミュニケーションが取れなかったほど崇高な存在であったそうだ。モシ族社会が興った頃からずっと続いているこの王位性は、国の政治的権力よりも、力を持つ存在として現存しているところが面白い。

モシ族の人々は、藁葺き屋根の家に暮らしている。一族は複数世帯で暮らすことが多い。円形に囲まれた敷地のなかに、複数の家が建っている。庭の中心は台所となっており、ここで女

性は炊事をする。水は井戸から取水するが、井戸の水汲みは女性と子どもの仕事。かなりの重労働であるが、モシ族の社会では、男性、女性、子ども、それぞれの役割が決まっている。村に遊びに行くと、温かく迎えて入れてくれ、ごはんを振舞ってくれることが多い。肌の色も違う、ヨソモノである日本人の



井戸の様子。子どもが水汲みをしているところ。1日1回、必ず水を汲む。笑顔の絶えない子どもたち



主食のトー。葉っぱソース。肉が入るとおごちそう



調理の様子。調理は女性の仕事。大きな鍋を使って大量に作る



綿花の収穫。ブルキナファソの主要な農産品のひとつ



マルシェ（市場）での物売りの子ども。学校が終わると、マルシェで物を売ってお金を稼ぐ

私を、まるで自分の家族のように受け入れてくれる。一緒に鍋を囲み、手を使ってごはんをほおぼると、本当にうれしそうにしているのが印象的だ。お客様に対して振舞うことは、日本と似ている。残すことは失礼にあらず、お客が食べきれないほど食事を提供することが、もてなす側の礼儀だとされている。

● 主食はトーと呼ばれるもの

彼らは、トウモロコシ、ヒエや粟を粉状にしたものを、お湯と混ぜ、練り合わせたお餅のような食べ物、トーを主食としている。私を訪ねてきた日本の友人が試食して最初に口にしたら、「とんぼの味の味。」何とも言えない表現であったが、案外的を射ていると感じた。トー自体はほぼ無味無臭である。味の決め手はトーにかける、ソースである。季節の素材に合わせたバリエーションのあるソースは、オクラや、トマト、現地特有の産物からなり、このソースの好みを村人とおしゃべりできると、「お前も村人だな」と、村人認定してもらえるのである。

● 挨拶がとても大切なコミュニケーション

ブルキナベの間で、しばしば時間をかけて行われるのは挨拶。日本人が想像する「おはようございます」という簡単なものではないので要注意だ。まず、「おはようございます」ここまでは同じだが、挨拶しながら、握手をせねばならない。握手を省略すると、村八分に遭うといつても過言ではないくらい、挨拶と握手はセツ



村のおばあちゃん。市場に売り出すために、木の棒を研いでいるところ。作業をする時も、優しい笑顔である。

まつなが ともこ

2013年7月～2016年1月まで、青年海外協力隊、平成25年度1次隊村落開発普及員として西アフリカ、ブルキナファソに派遣。村の水アクセスの確保や、衛生状態の改善に携わる。現在は、独立行政法人国際協力機構中国国際センターに勤務。

トだ。握手をしながら、お互いの家族のこと、仕事のこと、気になることなどを長い時間をかけて話す。これがブルキナベ流の挨拶。挨拶をきちんとなしないと、すぐに「あいつは無礼だ、優しくない」なんていわれ始めてしまう。

●家族がなによりも大切

ブルキナベは家族をととても大切にしている。子どもは大切な働き手であり、子どもを多く持つことが、いまだに村ではよいとされている。近代化の影響が、公務員など上流社会においては、経済的な観

点から子どもを敢えて多く持たない家庭もみられることが、日本社会とも共通することだと驚くこともあった。上流階級の人々ですら、自分の畑を持ち、雨期が来ると家族総出で農業にこそしむ。収穫の時期の農作業の様子は圧巻である。

●広く、大きなアフリカ

こうして、今や第二の故郷となったブルキナファソでの日々はあっという間に過ぎてしまい、帰国して感じることは、いかにアフリカが広く、豊かな場所であったかということである。隊員になる前に抱いていたアフリカに対する貧しい、未開の地といったマイナスのイメージは、この二年半で払拭され、私はすっかりアフリカに魅了されてしまった。確かに貧しい側面もあることも事実だ。しかし、そこで暮らす人々の笑顔は本当に心からの笑顔で、人々はとても幸せそうに暮らしている。そこで家族と同じように接してもらえ、来てくれてありがとうと何度もいわれたことが、忘れがたい思い出として、自分のなかに強く残っている。今度は私がブルキナベにお返しをする番。アフリカの人々の暮らしがさらによくなるよう、また一人でも多くの人々がブルキナファソのことを知り、興味を持てるよう、今後もアフリカ支援に関わっていきたくて強く思う。